

## 第8節

# 東日本大震災で、 視覚障害者支援の中核となる



未曾有の被害をもたらした2011年の東日本大震災では、  
仙台訓練センターをはじめ、盲導犬ユーザーやボランティアも被災しました。  
一時的に訓練センターの機能を失いながらも、  
当協会は被災した盲導犬関係者の救援、そして、被災した視覚障害者すべての支援を決断、  
東北における視覚障害者支援の中核を担ったのです。  
混乱状況下での事業継続のための震災対応の全容と復興過程における多くの課題について述べます。



### 発生と同時に災害対策本部を 立ち上げ、緊急対応を行う

2011年(平成23年)3月11日午後2時46分、東日本大震災発生。仙台市内で最大震度6強の揺れが、3分間にわたって4回観測されたという前例のない地震でした。仙台訓練センターには、当時、共同訓練生3人と外部見学者2人、職員十数人がいました。幸いけがもなく、施設自体の大きな損壊は免れました。発生

直後、仙台訓練センターとつながった電話で安否が確認でき安堵したのもつかの間、その後一切の連絡が途絶え、あとはテレビに映し出される悲惨な映像から被災地を想像するより他なくなりました。

直ちに協会内に災害対策本部を立ち上げ、神奈川訓練センター、富士ハーネス、島根あさひ訓練センターの職員を総動員して、被災地域の盲導犬ユーザー55人の安否確認にあたりました。幸いにもユーザーは全員無事で、親類宅や福祉施設などに避難されている方



停電となった仙台訓練センター内。皆で1か所に集まり毛布にくるまって夜を明かすことに。倉庫にしまわれていた古い石油ストーブが活躍しました

が5人いることもわかりました。また、ボランティアや飼育されている犬の無事も確認できました。しかし、PR犬1頭が行方不明となり、のちに犠牲となったことがわかりました。仙台訓練センターで、かつて視覚障害リハビリテーションに参加した291人の安否も次第に明らかになっていきます。ライフラインがすべて途絶えている中、災害対策本部では唯一復活したインターネット回線を利用して、仙台訓練センターの状況把握を行うとともに、危機回避へ向けた方策を探り始めます。

震災後の緊迫した状況の中、栃木県から帰りのガソリンの保証もないまま、車で食料や水を届けるために駆けつけてくださった方もいました。こうした支援に励まされ、協会職員は、盲導犬ユーザーやパピーウォーカー宅へ支援物資を届け、相談に乗るなど、ガソリンがなくなる寸前まで仙台市内を走りまわりました。

13日に電気が復旧し、電話による安否確認活動を開始すると同時に、仙台訓練センターに残された人と犬の救援救出計画が慌ただしく動き出しました。一部交通機関が復旧し、18日までには見学者2人、共同訓練中の視覚障害者3人のうち2人が帰宅できたのです。帰宅困難と判断された残りの1人についても、支援企業のご尽力で、神奈川訓練センターまで車で移動することができました。

こうしたユーザー支援を行う一方で、協会職員の自

宅や家族も被災していたため、仙台訓練センターでの盲導犬訓練は当面困難であると判断。即日、盲導犬総合支援センターの多大なる協力を受け、支援物資を仙台訓練センターに届けると同時に、訓練犬他17頭の犬たちを神奈川訓練センターまで無事避難させることに成功しました。

## 2 ユーザーの自宅・避難所を訪ね、地道な支援をスタート

4月初旬には、協会職員は各人自宅の片づけを終え、仙台訓練センターの勤務体制を整えました。そして、まず被災した盲導犬ユーザー宅を訪ね、状況を確認しました。避難先など新しい環境での生活を余儀なくされた方には歩行指導を行い、委託中のパピーウォーカー宅では個別にレクチャーを行うなど、震災後のフォローに全力を注ぎました。

一方、津波で九死に一生を得た方や家屋が流され甚大な被害を受けたユーザー3人については、状況を確認し支援へとつなげていきました。この活動と並行して、被災しながらもなんとか自活しているユーザー7人には「3.11とその後」に関する聞き取り調査を行い、震災時の盲導犬ユーザーと盲導犬の姿を明らかにしていきました。

激震の中、「この子を守らなくては」と盲導犬としっ



食料や水など救援物資が届き、手際よく積み荷降ろし作業をします。「団結と規律」が生かされていました

かり抱き合ったユーザー。結果的に盲導犬の存在がユーザーに冷静な行動を促したのです。避難所においても、盲導犬の受け入れに際して問題は起こらず、むしろ盲導犬の存在がユーザーと地域社会との結びつきを強くし、防災的役割を果たしていたようです。また、震災直後の当協会との密な連絡や支援が支えとなったことなども実態として浮き上がってきました。この調査は「東日本大震災被災ユーザー聞き取り調査結果報告書」としてまとめられ、今後の災害対策に生かされていきます。

さらに当協会では、宮城県沿岸部300か所余りの避難所を訪ね、視覚障害者がいた場合は、直接支援物資を手渡すという地道な活動も続けました。食料の他に、津波で流されてしまった白杖、音声時計、ラジオなど

の支援物資も届けたのです。その一方で、被災現場で不便なこと、困っていることを調べ上げ、職員がきめ細かな対応をしていきました。

たとえば「罹災証明などの手続き方法がわからない」「避難先では一人で入浴ができない」などの声には、各種情報を調べ手続きの代行をし、入浴は仙台訓練センター内にある入浴施設を開放して独自の入浴サービスを開始しました。仙台市内の入浴希望者には、車での送迎も行いました。「震災以来数週間ぶりに湯船につかることができ、ようやく一息ついた」と、避難所生活での緊張が和らいだのか、利用者からは笑顔がこぼれました。

そして、震災から2か月余りとなる5月25日、多くのメディア関係者を迎えた仙台訓練センターに、訓練犬など12頭が戻り、復興の第一歩を踏み出したのです。

## 東日本大震災・復興の歩み

新生

# 仙台訓練センターが 始動しました

温泉玄関前に  
盲導犬が大集合！



5月31日 秋保温泉『佐勤』前にて。盲導犬ユーザーはじめ視覚に障がいのある方を温泉に招待して疲れを癒やしてもらおうと企画された『温泉で一息いれませんか』の様子。14人が参加、温泉と食事を満喫した  
『盲導犬くらぶ』第63号2011年7月より抜粋



バギーウォーカーの自宅付近で  
「散歩の仕方」をレクチャー

### 3 視覚障害者支援対策本部設立に伴い、宮城県支部の中心で活動

今回の震災によって、被災した盲導犬ユーザーだけでなく、被災したすべての視覚障害者への支援を行うため、3月28日には日本盲人会連合、日本盲社会福祉施設協議会、全国盲学校長会の3団体を構成団体とする社会福祉法人日本盲人福祉委員会（日盲委）のもとに「東日本大震災 視覚障害者支援対策本部」が設立され、より広域の支援へ向けた動きが始まりました。

そして4月1日、当協会は常任理事会を開き、「東日本大震災 視覚障害者支援対策本部」への施設の提供、職員の派遣、資金確保など全面支援を決議します。対策本部運営委員会実行委員として吉川明（現・常任理事）が、対策本部事務局には仙台訓練センターリハビリテーション部の原田敦史（当時）が参加。仙台訓練センター内に支援対策本部宮城県支部が置かれました。ここを足がかりに、被災した視覚障害者が必要としている支援を把握し、必要物資を直接届けるといったきめ細かな対応を続けました。

ここで問題となったのは、支援に不可欠な視覚障害者の居住地情報がない、ということです。そのため、まず視覚障害当事者の会員リスト、点字図書館など利用者リスト、盲学校の卒業生名簿などから、被害の大きい沿岸地域の視覚障害者リストづくりを仙台訓練センターで始めました。

ラジオや白杖など支援物資の集積と並行して、全国から視覚障害リハビリテーションの専門家がボラン

ティアで集結し、岩手・宮城・福島3県を訪問し支援するという活動も始まりました。なかには、自身の障害を知られたくないと声を上げない方や、避難先での生活が困難なため半壊した自宅で飲まず食わずの生活を余儀なくされている方もいました。

宮城県被災地沿岸地域に居住している視覚障害者数は1,423人。これに対して、第一段階の調査で支援対策本部が状況を把握できたのはわずか約280人とどまりました。

6月に入り、沿岸部の重度視覚障害者全員に支援情報を宮城県が送付するという新たな動きが始まりました。経費を含め、資料づくりや発送準備などの作業は、すべて対策本部が行い実現したのです。送付資料はわかりやすく、シンプルな内容にするなど、専門家の知恵を集め作成しました。この宮城での取り組みが突破口となり、岩手県・仙台市・福島県いわき市が同様の対策を始め、被災地域全体で約4,000人に支援情報が発送され、要望があった1,455人の視覚障害者に支援を行いました。この支援で明らかになったのは、「音声時計」の存在すら知らない方が4割以上いるなど、中途失明者への情報支援の遅れでした。

こうした支援活動を金銭面で支えたのは、視覚障害者への災害救援活動を目的とし当協会が立ち上げた「盲導犬ハート募金」でした。メディアや当協会ホームページ、会報誌での呼びかけに応じた方々から、総額約5,400万円の寄付が集まり、震災対策本部の活動に貢献しました。



避難所を訪ね、視覚障害者がいるか、いないかの情報を集める職員

## 4

震災支援の経験を  
今後に生かすために

震災後半年近く震災支援活動を優先したため、被災地域では普及啓発活動を延期しました。その活動を再開したのは8月に入ってからです。まず、被災地の小学校・中学校を巡る「盲導犬学校キャラバン」をスタートさせ、PR犬や現役の盲導犬が被災地の子供たちに元気を届けました。9月に復興の旗印とした「盲導犬ハートデー」と銘打った見学会には、県内各地から心待ちにしていた多くの方が参加されました。

震災後1年の2012（平成24年）年3月11日、仙台メトロポリタンホテルでは、日本盲人福祉委員会・東日本大震災視覚障害者支援対策本部主催により『東日本大震災 視覚障害者支援のまとめと課題』と題するシンポジウムが開催されました。仙台訓練センターからは、宮城県支援対策本部の本部長やリーダー役を務めた協会職員が、そして被災者代表として盲導犬ユーザーも壇上に登りました。災害支援活動への貢献に対して、支援対策本部から日本盲導犬協会へ感謝状が授与されました。その後、2013年4月には厚生労働大臣から当協会へ感謝状が贈られました。

このシンポジウムでは、福祉避難所の重要性とその周知について討論がされる一方で、視覚障害者が日頃から近隣とのコミュニケーションを大切しておくことが重要であるとの指摘がありました。そして、いつ発生するかわからない災害に備え、行政・地域・関係団体が一体となったシステムの構築・準備が必要不可欠であることも再確認されました。

その後、未曾有の震災とその支援活動を通じて得たさまざまな経験を今後に生かすため、『災害時における視覚障害者の支援マニュアル』が作成・販売されること

となりました。

## ●視覚障害者用「視覚障害者のための防災・避難マニュアル」

日頃の備えから避難のポイント、災害後の生活まで詳しくアドバイスする

## ●支援者用「災害時の視覚障害者支援者マニュアル」

対象者：視覚障害者支援に携わり、災害への備え・災害時の支援を行う必要のある個人

概要：災害勃発直後→避難先→二次避難先→安定した生活への過渡期、それぞれの段階で必要な支援のあることを想定しておく

## ●支援団体用「災害時の視覚障害者支援体制マニュアル」

対象者：視覚障害支援に携わる施設・団体、その他関連行政機関や民間施設等の担当者

概要：視覚障害者の個人情報開示と共有化の条件整備、日頃からの関係団体間の連携、福祉避難所の認定など

日本盲導犬協会でも、東日本大震災における対応と災害支援活動を通じて、多くの知見を得ました。この体験をもとに、その後も発生するであろう震災や豪雨豪雪被害などにおいて、災害発生直後から該当地域の訓練センター長を中心に、速やかにユーザーやボランティアなどの安否確認を行い、運営トップに報告が行われるシステムが生まれました。それは2016年、コンサルティング会社BCGの支援によって提案された「事業継続計画（BCP＝Business Continuity Plan）」へと進化し、大災害発生時の基本的な考え方、緊急対策本部開設から職員の行動手順などがまとめられました。どのような状況下においても、当該事業を継続させ、視覚障害者の支援を可能とするための具体的な危機管理対策へと結実していきます。



2013年4月20日、厚生労働大臣より感謝状が手渡されました